
大規模災害発生初期におけるDMATと自衛隊とのコラボレーションに関する一考察

(森崎善久、日本集団災害医学会誌 18:1-8, 2013)

2013年9月9日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

大規模災害発生初期における医療活動では、多くの組織が混在するため組織間の連携が非常に重要となる。その中で DMAT(Disaster Medical Assistance Team)と自衛隊は災害時の医療活動において中心的な役割を果たすため、DMAT と自衛隊の質の高いコラボレーションは必要不可欠である。ここでは、東日本大震災における霞目と花巻 SCU(Staging Care Unit)を比較検討し、DMAT と自衛隊のコラボレーションを向上させるための課題を DMAT の早期投入要領、SCU 開設要領および組織間の体制の 3 つの観点で考察した。

DMAT の早期投入要領に関しては、宮城県では 3 月 11 日 24 時までに隣接の県より計 11 チームの DMAT が基幹災害拠点病院の仙台医療センターに参集できた。しかし、遠方(固定翼機による搬送が行われる地域)の DMAT が到着したのは最も遅いチームで 12 日午前 10 時頃であった。このことから、遠方の DMAT の早期の搬送要領の検討が必要である。現地の移動手段や装備に限られることから、偵察と初期活動目的に必要な最小限に限定して第 1 陣として搬送することを提案した。

SCU 開設要領に関しては、陸上自衛隊は衛生隊が全国的に配置されており計画・訓練がなされていれば迅速に SCU 開設が可能である。また、衛生隊が装備しているテント・暖房器具・寝具などの器材は SCU の設備として有効である。さらに、自衛隊では自衛隊無線や基地通信網およびそれを利用して確保した NTT 回線を用いて通信することができる。以上より、SCU(兼)自衛隊救護所として自衛隊衛生隊が開設することが迅速性、装備面、通信手段の確保の点で有効である。自衛隊衛生隊以外が SCU 開設を行った場合でも自衛隊が存在すれば自衛隊無線が活用でき、いかなる場合でも災害対策本部や自衛隊司令部および自衛隊航空機と最低限の連絡が可能となるため、少なくとも SCU に連絡員として自衛隊衛生隊の隊員を配置すべきである。

組織間の体制に関しては、自衛隊と DMAT はともに指揮命令系統が確立された組織であり、そのような組織同士が統合という形式をとることは効率的ではないと考える。そのため DMAT と自衛隊の共同体制を確立する必要がある。具体的には DMAT の事務局から末端の SCU までの各段階に対して自衛隊の衛生課の部署をカウンターパートとし、必要に応じて、お互いに連絡員を派遣することである。これらを考慮して顔の見える関係の構築が重要である。

最後に、自衛隊は大きな組織であり大規模災害時には DMAT の立場からは見えない任務も多く、DMAT との連携は難しいと考えるかもしれない。したがって、DMAT と自衛隊がより良い連携を図るためには各段階に顔の見えるカウンターパートを確保することにより柔軟性の高い共同体制を確立し、緊密な協力関係を構築することが必要である。